

CULTURAL FACTORS IN LOCAL REVITALISATION - IRELAND

アイルランド民話の宝庫 ブラズケット島の話

Neasa Ní CHINNEIDE

ネッサ・ニヒネーデ

[プロフィール]——アイルランド南西部ケリー州ディングル半島のアイルランド語使用地域で育つ。アイルランド国立大学ゴールウェイ校で歴史学、地理学、考古学を学んだのち、新設のアイルランド語ラジオ放送局でニュースアナウンサーを務める。アメリカ合衆国ウィスコンシン州立ウィスコンシン大学マディソン校に留学。1986年に帰国し、国营テレビ放送RTEに時事問題ブロードキャスターとして、まずアイルランド語時事問題担当者に、その後1995年まで（英語による）時事問題の制作部長及び役員を務める。1995年から半年間、家族と東京に滞在。帰国後、アイルランド語テレビ番組のスタートに際し、アイルランド語番組局長に任命され、アイルランド語番組編集局長を務める。また「欧州少数言語事務局」のアイルランド支部委員としても活動し、2005年に同代表。2009年まで同事務局における活動を続ける。他にも国立民族劇「シアマサ・チーレ」Siamsa Tíre、毎年ダブリンで開催されるアイルランド語文化祭「イムラム」Imramの委員を務めている。



Neasa Ní CHINNEIDE

1.1 序

アイルランド文化は、古代から現代に至るさまざまな経験を通じて出来上がった複雑な混合体です。エジプトのピラミッドよりもはるかな昔に作られたポイン渓谷の古墳群から、それに比べるとはるかに新しいヴァイキングやノルマン人や他の移住者たちによって作り上げられた風景に至るまで、常に変化し

続けて来た文化だったのです。最近の厳しい財政状況は、文化がつねにそうであったように、非常に重要な経済要因であることを思い出させました。

このシンポジウムは地域振興における文化要因に焦点を当てているので、まず手短かに文化経済の主な骨組みを見てみましょう。その後、文化がカギとなっていかに人々が結集し、チャンスの扉を開くことになったのかを、ブラズケット島という一つの地域に焦点を絞って取り上げてみましょう。

1.2 背景——輸出経済

アイルランドの経済は二つの重要な部分から成り立っています。

一つは安定的に機能している海外輸出部門です。2010年、アイルランドはIBM社によって、外国資本の投資による雇用創出に関して、人口比で世界一にランク付けされました。逆方向への投資のケースもあります。アメリカ合衆国には、アイルランド企業がおよそ200社進出しており、中でもケリー・グループは世界有数の農産物生産企業であり、南北アメリカ大陸で大きな事業を展開しています。

1.3 国内経済

その一方で、国内経済は近年厳しい不況に見舞われました。銀行の過剰投資が金融システムに深刻な打撃をもたらしたのです。アイルランド政府がこの累積赤字により国際通貨基金（IMF）の救済を受ける必要に迫られたことは、皆さんご存知のことでしょう。いま私たちはこれまで以上に革新的であらねばなりませんし、また文化経済が経済再建において重要な役割を担うものであることは確かです。

2.0 文化経済——概観

アイルランドにおいて、文化部門を支える母体は国と地域に分けられています。1951年に創設された芸術振興委員会は、幅広い分野の芸術家や催し物に資金を提供しています。有形の文化遺産に関しては、文化庁が主要な政府機関

です。フォールチェ・アイルランドは観光局で、観光事業を幅広くサポートしています。「芸術と観光は、アイルランドにさらに多くの観光客と収益をもたらす」をモットーに、強く文化観光を支援していることは注目に値するでしょう。2009年、歴史と文化を目的とした観光はおよそ20億ユーロ、約2,400億円をアイルランド経済にもたらしましたが、海外からの旅行者のうち5人に4人が、アイルランドを旅行先にした理由として「歴史や文化に対する興味」を挙げているのです。

3.1 ケーススタディ——歴史遺産の保存

ケリーはアイルランド南西海岸に位置するカウンティです。カウンティとはアイルランドにおける市町村より大きな行政単位で、日本語では「県」と訳されています。このケリー県では、農業と漁業が経済の頼みの綱でしたが、雇用を作り出すような産業基盤がないことは、すなわち、人々にとって、他の多くの人が選んだような、海外移住を意味したのです。

3.2 ブラスケット島の話

ケリー県のディングル半島の海岸線は、風光明媚な観光地として知られています。半島の先端にブラスケット島というとても美しい群島が浮かんでいます。観光客の多くは、アイルランド語の文学でもっとも有名な作品の一つがその島で書かれたという事実を知らずに通り過ぎてしまったかも知れません。島には、アイルランドでは最古に属する修道院共同体の遺跡がありますが、なかには先史時代にまでさかのぼる入植者の痕跡が交じっている遺跡もあります。

このブラスケット島には、注目すべき歴史を持った人々の共同体がありました。漁師だった彼らは、20世紀前半に驚くべき文学を作り上げました。もっとも有名な作家はトマス・オクリハンで、『島の人』(*The Islandman*)を書きましたが、この作品は世界の主要言語に訳されています。他の作家たちも、男女を問わず多くの物語を書き、アイルランド語の文化的なアーカイブを豊かにしていきました。このため、島はアイルランドの学者グループのみならず、例えばスカンジナビア各国、ドイツ、イギリスなど他国の偉大な民俗学者や言

語学者たちをも惹き付けました。そして、島の代表的な語り部であるペグ・セイヤーズという女性は、世界最高の語り部の一人と見なされていました。

島の貴重な文化的歴史にもかかわらず、1953年、島民は当時の政府の政策によって、立ち退きを余儀なくされました。島の漁業インフラは衰退し、住民の多くは年々アメリカ島北部に移住するために島を去りました。彼らはマサチューセッツ州スプリングフィールド周辺に特に集中し、またコネティカット州ハートフォードにも多数移り住みました。残った人たちは、島に近い半島の村々に住み着きました。1953年、彼らが自分たちのキャンバス布地で作った小舟に乗って島を離れたとき、彼らは持てるだけのものを持って出ましたが、ほとんどの場合、荷物の中には彼らの家を覆っていたフェルト製の屋根材が含まれていました。フェルト製の屋根は、島民を、吹き荒れる大西洋の風から心地よく守ったのです。それは悲しい別れでした。

島は島民が所有権を持ち続け、島はその後羊の放牧に使われました。グレート・ブラスケット島は、その自然の美しさや、島にいる野鳥やアザラシ、そして島の民話伝承によって、訪れる人々の興味を引き付け、彼らの多くは島の文化によって魅了されました。アメリカから自分たちの父祖の土地に何が残っているかを見るために帰郷した人たちもいました。私は島で八十歳の老人と会ったことがあります。その老人は十代の時に故郷を離れました。老人が昔住んだ家に残っていたのは、暖炉とそこで遊ぶ野ウサギだけでした。

「売りに出された島」

1985年のある日、アメリカのウォール・ストリート・ジャーナル紙に一つの記事が掲載されました。そこには「島売却中」とありました。このニュースはあっという間にアイルランドに伝わりました。やがてその内容から、その島はグレート・ブラスケット島だということが明らかになると、波紋は大西洋を越えて広がりました。

もしこの島が売られてしまったならば、貴重な文化遺産、アイルランドの偉大な作家たちの殿堂である、象徴的なこの場所が、永久にこの世から失われてしまうかもしれません。失われるのは、アイルランド語や北欧の研究者たちが民話を収集し、世界最高の語り部ペグ・セイヤーズが、ヨーロッパ各地からやってきた研究者たちに昔話を語って聞かせ、ジョン・ミリントン・シングの

ような作家が島の文化について学ぶために訪れた場所、アイルランド語研究者の多くがアイルランド語を完璧に使いこなすべく学んだ場所なのです。

多くの人が島の象徴的な場所の歴史を書いています、この島の文学を独特なものにしたのは、作家たちが自らの想像力によって、喜怒哀楽に満ちた自分たちの物語を書き上げたからでした。島は売りに出され、1970年代の三年間で20区画のうち17区画が売られてしまいましたが、誰も「やめろ」とは叫ばなかったのです。

地域社会の行動——人々の参加に対する自覚から

今や「どうすればいいのか？」が問題でした。

アイルランド西部における長い移民の歴史、ディングル半島の辺鄙さ、そして地域経済の主要産業だった漁業の衰退のため、雇用の創出は長いあいだ難しい問題でした。

国の対策は、たとえば実施されたところで、地域の辺鄙さが原因で、めったに長続きしませんでした。観光や漁業は、1950年代から続く、学生のためのアイルランド語サマースクールの主要文化産業とともに、半島の経済の大黒柱でした。観光業自体は成長していましたが、地域に大きな利益をもたらす引き金となる、本当に優良な産業基盤はなかったのです。

有名なデイヴィッド・リー監督が1970年代に制作した映画「ライアの娘」のような大きな出来事は、もちろんいくつかありました。それでホテルや宿泊施設が改善されるなど、多少の発展にはつながりましたが、世界の片隅に吹いた変化の風が近代化として歓迎されることはあっても、短命に終わってしまいました。半島には若くて小さな企業がやって来ては、また消えて行きました。かつての基幹産業であった漁業は、EUによって立て直されましたが、魚資源の枯渇が心配されるようになってからは縮小しています。教育を受けた若者たちは、その大半が、彼らの先人たちと同じように、19世紀から続く移民の伝統に従ってイギリスやアメリカに去って行きました。

アクション1985／1985年の活動——ボランティアが道を切り開く

地域社会のわずかな人々が、島を救うために立ち上がろうと決意しました。彼らは地域の人々の率直な意見を聞くために集会を開きました。そしてこの状

況に対応するためには、なにか組織を設立することが必要だと決断しました。活動計画の基本方針が作り上げられ、ボランティアによる地域委員会と全国委員会の両面から取り組みがなされることになりました。

1986年2月、第2回地域委員会が開催され、国から派遣された高級官僚である県知事が国家計画審議会の一員として参加して、次のような声明が発せられました。まず基金を設立する。その目的はグレート・ブラスケット島の保護管理である。また島と島の社会的・文学的遺産の重要性や文化の歴史を重く受け止め、継承するための提案をする。以上です。

続く数週間、数カ月は、地域の有力な人々や特殊な能力を持った人々を巻き込みながら、ことは順調に進みました。アメリカやカナダの「文化遺産」継承地域がどのように管理されているのかも調査されました。これはとても重要なことでした。こうして、地域や地方の所轄機関と議論するための土台となる、さまざまなアイデアを盛り込んだひな型が出来上がったのです。

その結果、グレート・ブラスケット島を国立歴史公園にするために、以下のような提案がなされました。

- 地域委員会の活動計画
- 知事と基金の主な提案をまとめる知事のチームのための説明的な計画。そこには島自体の保存作業の要求も含まれる
- 島の対岸の半島部に情報センターを建設する

役人たちは最善の用地評価の方法や、土地所有者の調査、保存と建設作業の執行者など、島のインフラに関する他の問題について経験に基づいた助言を与えました。国立歴史公園のプロジェクトの基準年として、1927年が選択されました。この年は、すでにお話したトマス・オクリハンの『島の人』が出版され、若き作家モーリス・オサリヴァンが後年『20年、ある成長』へと発展することになるテーマに夢中になっていた年でした。両作品とも今や世界的な古典になっています。その後も、男女を問わずこの地域の人々によって、また島出身のアメリカ人作家によってたくさんの本が書かれました。

人々の参加と募金活動

前進するのに必要な健全な土台ができると、今度は広く一般の人々を結集する必要がありました。つまり、重要な問題について見識があり、また地域、地方、国のレベルで人々を啓蒙し、情報を発信するための影響力のあるネットワークを作り、募金活動する人々を結集するのに必要な指導力を発揮できる人たちを捜すことです。

この目的を達成するために、プロジェクトの意義と目的を広く知らせる雑誌が発行されることになりました。雑誌は『アン・クィーヴノール』、つまり「守り手」と名付けられ、地域、地方、国レベルで広く販売されました。

第一の課題は、広く一般に目的の重要性を理解してもらうことでした。ネットワーク作りは、基金の目的に賛同する社会の各層に接点を作ることで初めて可能になるものでした。有力な政治家、公務員、企業家、諸学派の聖職者、国の内外を問わず、バスケットの文学や文化に愛着を抱く言語運動家や研究者たち一人一人と連絡を取り、その結果、皆がグレート・バスケット島を救うプロジェクトの社会的・文化的な意義を理解するようになりました。

1986年10月、この不屈の委員会は全国委員会の幹部を選抜していましたが、その後援者リストには、政治家、聖職者、大学教授、企業家、地域の人々、海外の研究者の名前が挙がっていました。プロジェクトの機運は高まっていたのです。ダブリンで行う全国決起集会の日取りが決められました。11月には、「友人たち」と呼ばれる募金活動を積極的に支える人々の組織が出来上がりました。

彼らの多くは半島の出身者であり、アイルランド語の教育・研究を通じて仲間になった人や、半島でアイルランド語を学ぶ若者たちでした。地域の農民からアイルランド政府のトップレベルの官僚に至るまで、今や多くの人々がグレート・バスケット島の運命に関心を寄せていました。

地域委員会は資金カンパを呼びかけました。さらに福引を催し、賞金や賞品が当たる券を販売しました。このイベントには日本企業も関係しています。トヨタ・アイルランド社は、毎月一台の車を賞品として提供しました（福引でお金が集まれば、車の代金は支払われますが）。これは大成功でした。委員会のメンバーは県内各地、またときに県境を越えて走り回り、アイルランドのみならず海外にまで福引券を販売しました。地域や国内の反応はもちろん、イギリ

スやアメリカ合衆国の反応も非常に大きなものがありました。この冒険的事業の成功を地域社会のレベルで裏付ける出来事があります。1988年5月、地元の農民がトヨタの自動車に当選したのです。それは今でも彼の誇りであり喜びです。この半島におけるトヨタの評判は安泰でしょう。

この計画を達成すべく奔走した基金のメンバーの献身的な働きによって、38万ユーロ〔およそ4,600万円〕の募金が集まりました。1989年には、全政党の議員に支持されて、「ブラスケード・モール歴史公園」法案が国会を通過しました。それは目標の達成のため、一所懸命に働いてきた人たちすべての人たちにとって、最高の瞬間でした。

ブラスケッド島センター

半島にセンターを建てるという構想は、初めは複雑な思いで受け取られました。しかし文化庁は断固として、有名な建築家たちが設計する建物は、本土でしか実現できないと主張しました。しかもこのことは、島と島の貴重な植物や野生動物が手つかずのまま残されることを意味していました。

センターの建物は、島を一望するブラスケッド海峡の海面に近い崖の上に建てられました。素晴らしいロケーションで、敷石の敷かれた教会のような空間を歩いて行くと、眼の前に島の眺望が現れるのです。そこには自分たちの物語の語り部であった、島の男性や女性の作家たちの写真があります。著名な学者たちによって育てられ、励まされたとはいえ、彼らは自分たちの物語を創り出したのです。

反対側の壁には、島民が伝えて来た島の野生動物たちの写真があります。アーカイヴには、島民とその子孫の系譜や記録のすべてが、島民の実際の記録として委託されています。

日常生活の工芸品、例えば島民のボートや道具や衣服も、すべてそこに展示され、外国に移住した——特に新世界のマサチューセッツ州スプリングフィールド——が、いつも故郷を思っていた人たちの話なども紹介されています。

重要なのは、このセンターが地域の人々の希望を汲んで、国家によって作られた場所であるということです。ここは世界で唯一のハイレベルなアイルランド語文化遺産センターであり、優れた研究者たちがアイルランド語の歴史的な背景や民話や文化を探求するための、最高のセンターとなることが期待されて

います。

祝祭と新しい研究

バスケット島センターの重要な年間行事に、ケーリューラ、すなわち「祝祭」が挙げられます。バスケット島基金のメンバーによって、毎年10月に開催されます。これはレベルの高いシンポジウムで、島の地域社会やセンターの仕事と関連するテーマについて、地域や国内のみならず海外の研究者をも招聘します。

これまで、ヴァイキングやジョン・ミリントン・シングやバスケットの文学や宗教など、さまざまなテーマでシンポジウムが開催されました。昨年10月に開催されたシンポジウムの基調講演では、「アイルランド国教会とケリー県西部のアイルランド語文化」がテーマとなっていました。この講演で明らかにされた島のアイルランド語伝統の特徴は、地域社会に全く新しい自覚を呼び覚ましました。アイリーン・フェーラン博士の講演の要点を引用します。

「アイルランドは20世紀初頭まで大英帝国の一部で、プロテスタント側は、帝国の領地で話される少数言語に関心を寄せていた歴史があります。いわゆる「第二宗教革命」と呼ばれた時期に、アイルランド西部のアイルランド語を話す人々を対象に、特にアイルランド語母語話者を、アイルランド語によって改宗させようとしたのです。アイルランド語で伝道し、教育することによって、土着の文化と接触する、それまでにない新しい手段がもたらされたのです。

アイルランドは次第に「進歩の実験室」と見なされるようになりました。ここでは、プロテスタントの布教によって土地の人々が忠実で平和的になると期待されたのです。ちょうど18世紀後半にプロテスタントへの改宗が目覚ましく進んだウェールズやスコットランドの人々のように。

プロテスタント布教団体が半島に設立され、プロテスタントの学校がバスケット島に作られました。アイルランド語で教育する先駆者たちが遭遇した、面倒で煩わしい状況のひとつは、アイルランド語しか話せない人たちが、アイルランド語の読み書き能力を習得できないことでした。教師がアイルランド語しかできない生徒たちに読み書きを習得させたければ、まず彼らに英語を教え、英語の読み書き能力を習得させなければならなかったのです。アイルランド語

の読み書き能力はその適用であり応用だったのです。しかしバスケット島では、それまで英語が話されたことはなかったのです。1864年に宣教師たちによって島に建てられた学校で、子供たちに読み書きが教えられたとき、それはアイルランド語を通してだったと推測されます。

こうして見てくると、バスケット島の人々が、今は本土にいる島民の子孫に至るまで、なぜ20世紀になって、トマス・オクリハンの傑作『島の人』をはじめとする、あの一群の文学作品をものすことができたのか、その理由はおのずから明らかでしょう」。

このように、学問は島の文化的・社会的な歴史にまつわる複雑な過去への新しい意識を呼び覚ましました。美しい景観で知られた島は、今や他のさまざまなことでも有名になりました。農業が衰え、移民が続き、アイルランド語の存続が危機に瀕していた地域社会に、島の遺産を再評価する国内外の人々が集まって来たのです。マサチューセッツ州スプリングフィールドにあるバスケット島民団体の代表は、バスケット島生まれで90歳を越えていますが、一昨年、バスケット島センターの特別セレモニーで名誉学位を授与されました。このことは島を離れた人々やその子孫によって継承される伝統の意義を再確認することになりました。

センターは、地域や島や島の文学に関するデータベースを作成・保管するという目的に従って、現在このプロジェクトの重要な支援者であったチャーリー・ホーヒー元首相の重要書類をアーカイヴに保管しています。これはセンターに託された島民の家系的なデータベースや、最後に残った島民の記録映像、そして毎年開催されるケリューラの成果とともに、地域や国内外の未来の研究者たちにとって重要な資料となります。

人々がグレート・バスケット島の複雑な歴史と島の遺産を救うためのキャンペーンに発揮した並はずれた努力は、ものごとを変革させる力があつたという表現だけでは収まりません。文化を再評価するということが、ディングル半島西部では雇用を生み出す新たな力となり、自信につながりました。昨夏には、グレート・バスケット島を初めてアイルランド語で案内するガイドたちも生まれました。

今では、島の民家や他の建物などの景観を保存する作業の準備も整いました。

半島の歴史文化遺産が、実際に経済の牽引役となり得ることが証明されたのです。

設立以来、毎年4万から4万4,000人がセンターを訪れています。その経済効果は地域全体に広がっています。しかし最大の利益は、たぶん文化の理解への寄与だったのではないのでしょうか。それはヨーロッパの片隅にこのセンターを設立するという仕事を通じて生まれた新しい認識から始まり、少しずつ人々のあいだで育っていったのです。いつの日か、皆さんもセンターを訪れ、ユニークな島の社会の生活や民話を学んでみてはいかがでしょうか。

(訳：平島直一郎)